

文献と研修の必要性

入会に資格が必要なく、入会時期が決まっているわけでもなく、任意に入退会出来るワイズメンズクラブでは、会員の「研修」は、常に欠かせません。しかも、役員は、任期が原則1年間、頻繁に変わり、いつも顔を合わせているわけでもないので、口伝えの伝承だけではなく、「文献」が必要です。

ワイズにおける研修さまざま

現在、ワイズの研修は、さまざまな機会をとらえて行われています。

会員レベルでは、入会式の式辞を事前に渡されて、読むことが最初の研修といえます。熱海クラブや熱海グローリークラブは、インフォメーションと称して、入会前にクラブについての説明会を行っています。東新部では、入会間もないメンバーを対象にフレッシュワイズ・セミナーを実施していますし、区でも行ったことがあります。

東京たんぼぼクラブでは、役についた人は、新年度の初例会で、ひとりずつ自分の役割内容と具体的な方針を発表しています。役を自覚するとともに、他のメンバーが役員と自分の関係が確認できるという点で優れた方法といえるでしょう。

次期役員研修を行っている部もあります。

区は毎年、次期区役員研修会と、1泊2日の次期クラブ会長・部事業主査研修会を行っています。

次期区理事に対しては、エリアで毎年11月か12月に、2泊3日のRDEトレーニングがあります。それまでは、ふんざりがつかない様子だった次期区理事が、この研修を境に、刮目すべしというべきか、一気に変身します。多分、その年度の

研修を受けたのは、区で自分一人だという自信と自覚によるものだと思います。「学ぶということは、変わる事」であるなら、最も効果の表れる研修だと言えるでしょう。

1982年から2000年まで、日韓ワイズメンズ会議が行われていました。これは国際ワイズメン韓国日本指導者合同研修会あるいは日韓セミナーと呼ばれたものです。1981-1982年の国際会長だった韓国区の Joseph Ohm さんの提案でした。元大使。戦前、関西学院大学神学部で学び、独特な国際感覚、歴史観を持っていました。

「いずれ、ワイズはアジアが中心になる。その時、韓国と日本は中心的な役割を果たさなくてはならない。韓国に日本語の分かるワイズメンがいるうちに両国で勉強しよう」という趣旨でした。毎年、両国が交代でホストを務め、区役員を中心に研修が行われました。

しかし、第1回の会議でアジア地域事務所の設置が話されるなど、地域の諸問題が議題となることもあり、アジア諸国のワイズメンが力をつけてくると、アジア地域の中で2国だけで集まることに批判が出て、中止することになりました。18年間、どちらかといえば内向的であった両国ワイズメン指導者が国際に目を向けたという点で成果がありました。

俊英を育んだ奈良私塾

1961年に大阪 YMCA 総主事を勇退した奈良傳さんは、土佐堀会館の一室で、『大阪 YMCA 史』を執筆しました。同時にこの部屋でワイズの大阪サービスオフィスを開き、後に文献サービス、文献保存、物品サービスとなる業務を始めました。

1960年から、奈良傳さんを委員長とする文献委員会が設置され、委員が分担して文献類の邦訳、制作が行われていました。「国際憲法」、「同細則」、「国際ワイズメン法規集」が邦訳、「日本区内規」が成文化され、「新しいクラブ作りをするには」、「ワイズメンクラブに就いて」、「クラブモデル会則」などが発行されています。

1960年3月には、近畿クラブ連合新役員研修会が開かれ、出来たばかりの文献を用いて研修を行いました。「文献」と「研修」が一体でした。

1963年からは、国際書記長・ジェリー・ハイル（Jerry Heyl）から毎月送付される20～30頁の文書『ワイズフーツ（Y'S Hoots）』を翻訳して、区役員やクラブ会長に配布しました。その後、委員が分担するようになり、毎月1人3頁ずつを、2日間厳守で翻訳して、奈良さんが監修して印刷しました。文献委員会は毎月開かれていました。

奈良さんを「先生」と慕うワイズメンや海外のゲストが部屋を訪ね、ワイズ談義に花が咲き、梁山泊のようなものであったであろうと想像出来ます。若手の委員にとって、奈良さんとともに働き、意見を交わすことが、「研修」だったともいえます。区の文献委員長は、1964年から16年間、この委員たちが務めました。

「Y'S Hoots」のHootsとは、フクロウの鳴き声です。元国際書記長のヘンリー・グライムズ（Henry Dustin Grimes）は、本業は技術者で、専任となるまでは、夜間、自宅を事務所としてワイズの業務を行っていました。そのため、「事務所フクロウ（Office Owl）」と自称していたので、「ワイズの声」という意味で、「Y'S Hoots」と名付けたのです。

日本区時代の文献委員会

1973年、日本区事務所が大阪YMCAから、東京の日本YMCA同盟内に移転しました。

必然的に、文献・物品のサービスも東京に移りました。当初は、文献委員会が物品の販売も行い、会計報告も作成していました。

1975年、物品サービスが分離して、物品部委員会が設置され、1979年には物品サービス事業主任が置かれるようになりました。

1978年に文献委員会の中に文献保存委員がおかれ、特定の資料の収集、保存を行いました。

現在の役割のヒストリアンが登場したのは、1990～1991年度からです。1983-1985年に鈴木謙介さんがヒストリアンを務めました。元国際会長として、現在のヒストリアンとは、期待されるものが違っていたようです。

1983-1984年度に、「ワイズメンズワールド」の日本語版の編集を文献委員会が行うようになり、その後、現在のワイズメンズワールド日本語版作成委員会となっています。

日本区時代の文献は、当初は文献委員会主導のものが多く、やがて、事業委員会主導のもの加わるようになりました。

日本区時代の区の研修

1970年代までの区としての研修は、主に日本区大会で分団協議という形で行われていました。

独立した研修会としては、1965年に、当時、ワイズの事業であった「メンバーシップサービス（会員奉仕）」研修会が名古屋で行われました。各地、各事業で研修が始まりました。

BFの使用済み切手の整理については、BF事業主任がマニュアルを作成し、部会などの機会に研修をしました。切手整理・送付方法が複雑だった時代には、研修は欠かせなかったのです。

京都を中心にEMCシンポジウムが行われるようになり、1981年8月には、第1回日本区EMCシンポジウムが東京で開かれ、その後も折々に、開催されています。

区の次期役員研修としては、1981年にワイズとYMCAが国際レベルで『協力関係の原則』を承認したため、その説明を4月の区役員会で行い、次期役員も同席したのが契機となって、以来、4月の区役員会は、次期役員の研修を兼ねて、合同で行われるようになりました。

日本区の「リーダートレーニング（LT）元年」と目されるのは、1983 1984 年度（田中真区理事・東京）でしょう。この年度は、クレア・グラハム（Clare Graham）国際会長が「組織強化のためには役員研修が必須」と呼び掛けました。国際会長の要請を受けて、区は、YMCA サービス事業主任が LT 事業主任を兼任することになり、事業の一環として 1984 年 6 月、仙台での日本区大会の開会に先立って、朝 9 時から正午まで、第 1 回次期クラブ会長研修会が実施されました。その後、区大会前の研修が継続されました。

しかし、新年度が始まる直前の 6 月の研修は、時期的に問題があり、どうせなら早くという要望がありました。当時は、現区理事の任期中の次期区理事が動くことは行儀が悪いことだとされて、次期区理事が遠慮していました。

1992 年、森田次期区理事が、加藤利榮区理事の了解をとって、11 月に次期区役員懇談会を行いました。これが次期区役員研修会として定着し、区大会とは切り離して行うようになりました。

研修は、区の方針で部に委譲しようとしたことなどがありましたが、1990 1992 年は EMC 事業の担当とすることになりました。

1994 年、区長期計画委員会からワイズ国際大学（仮称））設立の構想が持ち上がりました。このことについては、ここでは述べません。設立準備委員会において、ワイズの研修を担当するワイズアカデミー委員会の設置が提案され、区役員会で協議の末、実行に移されました。この委員会が、1997 年まで、次期区役員、次期クラブ会長研修を担当しました。

東日本区になってから

1997 年、東・西日本区の分割が行われました。東日本区は、部に権限を委譲し、区としては「小さ内閣」を目指し、事業主任、委員会を縮小しました。委員会は、とりあえずは文献委員会のみが残り、文献、文献保存、LT を担当することになりました。組織を変えない基本方針だった西日本

区は、文献委員会を廃して、ワイズアカデミーを残しました。ヒストリアンは、齊藤實さん（当時東京北）が、両区を兼任しました。

しかし、この年から、東京オリンピック記念青少年センターで研修を行いました。しかし 1 年で、LT 委員会が文献委員会から、独立しました。これは、当時は、まだ、区定款も暫定で、諸規則などの制定など、文献委員会の業務が過多になること、加えて、集団研修会の「運営」の業務は文献委員会に合わないという点でした。翌 1998 1999 年度（原昭三区理事・伊東）には、実務に強い、直前三役、現三役が委員となりました。しかし、開催地以外から理事が選出された場合の不都合もあり、1999 2000 年（中田靖泰区理事・札幌）から、常置委員会として理事事務局に限らない委員構成となりました。

東日本区になってからの命題は、部の強化でした。1998 年 1 月、部長研修会を終えた後、部の強化には部事業主査の活躍が欠かせないということから、急遽、部主査研修が企画されました。部主査は、日本区時代からありましたが、役割が明確でなく、「盲腸のようなもの」と言われていました。3 月に次期部事業主査および次期クラブ会長研修会というかたちで実施されました。

文献では、「部長マニュアル」「部事業主査の手引き」「クラブ運営マニュアル」などが整備され、区のウェブに掲載されるようになりました。

現在の文献、研修の分担

委員会の事業内容は、2007 年 7 月から、「文献委員会規則」「LT 委員会規則」が制定され、明確になりました。

文献委員会の役割は、他の委員会などが制作するマニュアル類の監修、理事から指示された文献関連事項、国際憲法、地域ガイドラインに関わる規約、文献に関わる事項、となりました。

一方、LT 委員会は、会員のリーダーシップの開発と向上を図ることを目的として、研修会の実施、研修の支援、マニュアル類の制作、発行が主

業務になりました。

マニュアル類は、必要性を感じる部門が作って、文献委員会は監修するという立場になりました。現実を知らない（知らないわけではないのですが）文献委員会が作るのではなく、担当する部門が、使いやすいものを作ろうという方向です。

校正、セミナーが専門でないはず

ここからは私の考えです。文献委員会も LT 委員会も自ら枠を狭め過ぎているように感じます。

文献委員会が、他の委員会が作ったマニュアル類を監修するだけ、理事から指示された事項を行うだけでなく、自ら発案するものがあるのもよいのではと考えています。

LT 委員会は、上記の「規則」とは逆に、次期区役員研修会と次期クラブ会長研修会の運営だけに特化する方向に進んでいるように見えます。皮肉なことに、かつて文献委員会が負担と感じ、LT 委員会が生まれる動機のひとつとなった、研修会の「運営」の負担が、LT 委員会に本来期待される活動を阻んでいるのではないのでしょうか。

お叱り覚悟で言わせていただければ、研修会の「運営」は、区理事（現でも次期でも）のホームクラブにお骨折りいただければと思います。ホームクラブのメンバーにとっても、理事と一緒に働ける数少ない機会となるのではないのでしょうか。

一体となってもっと大きな網を

メンバーの研修は、区でいえば、トップである区理事の大切な役目です。しかし、任期が1年ですから、これを支えるために常置委員会があるのでしょうか。網をそれぞれ張るのでなく、「文献」と「LT」が一体となって、大きな網を張る必要があると思います。

あとがき

10年ほど前、ある次期クラブ会長が、「前に経験したことがあるから、次期会長研修会には参加しない」と言うので、思わず顔を見てしまいました

た。「なんにも分かっていない！」。

私の経験を書きます。日本区時代の1983-1984年、文献サービス事業主任として、『ワイズの事務手続便覧』を企画しました。それは、クラブ役員がリーダーシップを取り切れないのは、細かい事務上の手続を正確に理解していないことに理由があると思ったからです。それらのことを網羅した28頁のポケットサイズ原稿は出来ましたが、経費がなく、ボツになりました。

翌年度の区理事、野村秋博さん（名古屋東海）が発行してくれました。しかしこの年度きりで終わってしまいました。

14年経って、東日本区になった1997-1998年度（鈴木健次区理事・東京ひがし）に、次期部事業主査研修会が急遽決まり文献委員長だった私が『事業主査の手引』の作成を命じられました。40頁のもので、「事務便覧」を下敷きにしたので、数日でできましたが、一番時間がかかったのは、14年間の変更点の確認・修正でした。

便覧の場合、期限、金額、送付先など、数字や固有名詞が違っていると、1銭の価値もありません。

ですから前に研修を受けたということは、役に立たず、むしろ混乱を招くのです。手引類は、校了したその瞬間から陳腐化が始まりまるのです。

また、最新のマニュアルを読んだから良いというものではありません。

会長として12カ月の任期を充実して過ごすには、同じ年度の区役員や他のクラブの会長と気軽に情報交換ができることが重要なことです。そのことによって会長職が一層楽しく務めることができます。同期は、ひとつのチームなのです。

国際、アジア地域、区、YMCAの最近の流れも聞く機会も他にはありません。

同じ志を持つもの同士の交わりの素晴らしさ、これを体験してこそ、クラブのメンバーに部会や区大会への参加を薦められるのだと思います。

副次的には、研修中に、半年分の卓話者を決めて帰る豪の者もいます。

次期研修会は、毎回、新鮮で意味があるのです。